

平成22（2010）年度
東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻
修士課程（文化・人間情報学コース）
入学試験問題
専 門 科 目

（平成21年8月24日 14：00～16：00）

試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。開始の合図があるまで、下記の注意事項をよく読んでください。

1. これは、文化・人間情報学コースの問題冊子である。
2. 本冊子の本文は3ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあった場合には申し出ること。
3. 解答用紙は4枚ある。第1問は、解答用紙1枚（両面）を使うこと。第2問は、選択した問題ごとに解答用紙1枚を使うこと。このほかにメモ用紙が1枚ある。
4. 解答用紙の上方の欄に、必ず受験番号と選択した問題番号を記すこと。受験番号と選択した問題番号を記入していない解答は無効となる。
5. 解答には必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用すること。
6. 第1問は日本語で答えること。第2問は日本語か英語で答えること。
7. 試験開始後は、中途退場を認めない。
8. 本冊子、解答用紙は持ち帰ってはならない。
9. 次の欄に受験番号と氏名を記入すること。

受験番号	
氏 名	

文化・人間情報学 第1問 Question L1

以下の(A)と(B)は、「写真」について異なる立場から論じている文章の一部である。2つの文章の観点の違いに注目しながら、(1)から(3)の設問に、解答用紙1枚(両面)以内で答えなさい。解答文のはじめに必ず問題番号を記すこと。

(A) 一枚の写真はたんに写真家がひとつの事件に遭遇した結果なのではない。写真を撮ること自体がひとつの事件であり、しかもつねに起こっていることに干渉したり、侵したり、無視したりする絶対的権利をもったものなのである。私たちの状況感覚そのものが、今日ではカメラの介入によって明瞭になっている。(中略) 事件が終わったあともその写真は存続し、その事件にそうでもなければえられなかったような一種の不滅性(と重要性)を付与するのである。ほんものの人間がそこにおいて自殺したり、べつのほんものの人間を殺したりしている間に、写真は自分のカメラのうしろにいて、もうひとつの世界——私たちみんなよりも長続きすると宣言している映像世界——の小片をつくっているのだ。

写真撮影は本質的には不介入の行為である。ヴェトナムの僧侶がガソリンの罐に手を伸ばしている写真とか、ベンガルのゲリラが縛り上げた密通者に銃剣を突きつけている写真のような、現代写真ジャーナリズムの忘れることのできない偉業のもつ恐ろしさも、ひとつには、写真家が写真と生命のどちらを選択するかというときに、写真の方を選択することが認められるようになったのだという感慨に根ざしている。介入する人間は記録することができない。記録している人間は介入することはできない。ジガ・ヴェルトフの傑作『カメラを持つ男』(一九二九)には写真家の理想像があって、間断なく動く人間、まったく別種の事件がつぎつぎ展開するなかを、介入するなど思いもよらぬ敏捷さで動く人間が映し出されている。ヒッチコックの『裏窓』(一九五四)はその像を補うものである。ジェイムズ・スチュアート演ずる写真家は、足を骨折して車椅子にしばられているというどうしようもない理由で、カメラを通してひとつの事件に濃密な関わりをもつ。一時的に動けなくなったために彼は眼で見るものに従って行動することができず、そのために写真を撮ることはますますもって重要となる。身体的な意味での介入とは相容れないにしても、カメラを使うことはやはり参加のひとつの形式である。

(B) 写真は一面では選択の芸術といわれてきた。それはつくりあげるのではなくて、すでに存在しているものを像として切りとるからであった。だがこの選択の構造に対して、意識はわれわれがあまり知らぬ偶然と同じ程度にひとつの契機であるにすぎないことはあまり意識されていなかった。ただそれはある意味では決定的な契機である。だからこの決定性にもとづく選択の概念はそのまま通用するとしても、それが、主体から素朴な実在論の上になりたっている客体を一方的に見る限りは正確ではない。偶然や、とうていおよばぬ超越性との一種の協力が、最後までおのれのなかにとりこみえぬことを知りつつ遂行することが、写真に課せられた役務なのである。

これらのことは、人間の意識や存在を矮小化しようとしてのべているわけではない。むしろ、近代的な自我意識の廃絶や二元論の否定をいま機械の侵入によってさまざまな芸術が試みるなかで、それを可能にする構造が写真によってすでにひきよせられていたはずであり、いまそのことを正確に見出すということをいっているのだ。

具体的な問題にもどして考えれば、たとえばエドワード・ウェストンらのF64のグループは、写真によるディテールの把握と統合は生理的な眼をこえていることに依存した方法を主張したことも、実はこの構造をうらがきするものだった。フレームをきめるにはわれわれの網膜を介しているが、それさえも上にのべてきた構造的な知覚である以上、網膜像を決定者として考える絶対の必然性は消えているのである。われわれがもっとしばしば経験していることではファインダーをのぞかないで写真をとることがあり、そこで得られたものも、われわれは自己の知覚とみなしてそれを棄てはしないのだ。つまり、もはや一方的に主体から客体に向うリアリズムの視覚は無意味となり、「視覚」と網膜像との無条件な同一性も喪われ、「視覚」の意味は、むしろすでにのべたようにわれわれの肉体や意識やわれわれをとりまくさまざまな事物とのあいだにつくりだされる一種、構造的なゲシュタルトだといえるようになるだろう。

(1) 下線部について、なぜそのような主張ができるのか、文章中から読み取れる論拠を250字程度で説明しなさい。

(2) 同じ「写真」を対象に扱いながら、(A)と(B)が示している観点はどのように異なるのか。それぞれの文章が背景にしていると思われる問題関心や視座の違いに留意して、両者の違いを500字程度で説明しなさい。

(3) (A)と(B)に示された観点の違いは、「写真」以外の様々な表現や研究にも存在する。あなた自身が関心のある表現や研究において、(A)または(B)のどちらの観点に意義があるかを説明しなさい。字数はとくに制限しないが、解答用紙1枚(両面)の範囲で記述すること。

文化・人間情報学 第2問 Question L2

以下の9つの用語から3つを選び、それぞれ10行程度で説明しなさい。英語で答えてもよい。1つの用語について1枚の解答用紙を使い、解答文のはじめに必ず選んだ記号と用語を記すこと。

(a) 脳における身体運動の表象 (body schema in the brain)

(b) 社会進化論 (social evolution)

(c) 資料批判 (source criticism)

(d) オートポイエーシス (autopoiesis)

(e) 状況的学習論 (situated learning)

(f) 国勢調査 (population census)

(g) ナム・ジュン・パイク (Nam June Paik)

(h) 認知的制約 (cognitive constraint)

(i) アウラの消失 (shattering of the aura)